



説教要旨「苦しいときこそ神頼み」

使徒言行録4章23～31節

エルサレムの教会は存亡の危機に直面していました。中心的な指導者であるペトロとヨハネが捕らえられ、ユダヤ社会で絶大な権力を持つ祭司長たちや長老たちに「イエスの名によって離すな、教えるな」と、散々脅されて帰ってきたのです。しかし、彼らはそこで、その嵐のただ中であってもなお、彼らと共にいてくださるイエス様を見上げ、祈ったのです。

大きな困難に直面した彼らの祈りは、「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です」(24 節) という呼び掛けから始まります。天地万物を創造された全能の神が、今もこの世界を支配しておられることを信じて祈り始めるのです。そして、自分たちを守ってくださるようにと祈るのではなく、むしろ脅しや迫害に屈することなく、「大胆に御言葉を語るができるようにしてください」(29 節) と祈るのです。

苦難の中で祈ることは大切です。困難に直面したとき、遠慮なく主の助けと守りを祈り求めたらよいのです。しかしそこで大切なことは、何のために苦難から逃れることを求め、直面する困難からの救いを求めるのかを見つめることです。自分の幸せや平安のためではなく、それによって福音が前進し、主の栄光が大いに現されることのために祈ること。大胆に主の恵みを語り伝えることのために、困難が除かれ、苦難から自由にされることを求めるのです。

わたしたちの信仰に力がなく、喜びがないのは、結局はそこで自分の幸せを求め、自己を満足させることのために生きているからではないでしょうか。どんな困難や苦しみの中にあっても、それによって福音が前進し、御言葉が大胆に語られていくとき、そのために自分の苦しみと祈りが用いられていることを知るとき、わたしたちは本当の喜びを知り、満たされていくのです。

わたしたちも、様々な困難と戦いの中で、使徒たちと共に、祈る者とされていきましょう。「主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るができるようにしてください」と。

(2021・8・22 説教者：稲垣真実)